

古代史のなかの朝鮮文化—東アジア世界と日本—

Korean Migrants and Ancient Japan: East Asia and Japan

井上 満郎*
Inoue Mitsuo

Abstract

Korean Migrants who settled down in the Japanese archipelago from the Korean Peninsula played a great role in the history and the culture of ancient Japan. We can find a lot of traces such as Chinese characters used in Japan, Buddhism for religious belief and Confucianism for ethics and morality around us even now.

Although Korean Migrants relocated several times, those who made the greatest impact on Japanese history and culture were the ones in the 5th century. The foundation of Japan was formed around that time and we normally call it “The Early State.” The advanced culture and civilization brought by Korean Migrants are acknowledged as background factors. Korean Migrants greatly advanced the history and the culture of Japan: the Japanese archipelago, which is separated from outside by an ocean, was far from isolated. China, the Korean Peninsula and the Japanese archipelago formed their history and culture through active interaction and contacts.

Although many researchers point out that fact that Korean Migrants settled in Japan, their route remains to be confirmed. A concrete case of Korean Migrants is discussed in this article, using the ancient Japan sea or Donghae (East Sea) which is shown as “Kitatsu-umi” in Chronicles of Japan.

I. 貨泉の発見

京都府北部日本海岸の丹後半島、この小さな半島の西の付け根あたりに、弥生時代の函石浜遺跡（京都府京丹後市久美浜町箱石）がある。現況は海浜部の雑木林だが、かつては人々の居住があって、大正年間のそれなど（梅原末治「湊村函石浜石器時代ノ遺跡」、『京都府史蹟勝地調査会報告』第2冊京都府・1920）、何度かの報告・調査も行なわれている。なぜここから稿を起こしたのかというと、貨泉が発見されているからである。

貨泉は日本中世に大量に輸入され流通した宋銭・明銭などの他の中国銭とともにこの遺跡から出土していて、ためにその中世の輸入銭とする見解もある。ただ遺跡での出土地点は場所を異にし、弥生時代のものとみなしてよいと思われる（京丹後市丹後古代の里資料館『函

* 京都市歴史資料館長・京都産業大学名誉教授

石浜遺跡とその発見者たち』同資料館・2006)。

この貨幣は周知の如く、中国新王朝の王莽の鑄造にかかる。新は西暦8～23年の間のごく短期で滅亡した中国王朝だが、したがってその鑄造にかかる貨泉の通用もほぼこの期間ということになり、おそらく新たに後漢王朝によって五銖銭が鑄造される西暦40年をそう越えない頃までのことと思われる(田中琢・佐原真『日本考古学事典』三省堂・2002)。はるか2000年前、この貨泉をたずさえた人々が、アジア大陸の文化・文明とともに日本列島を訪れていたのであり、日本がそれらの人と文化・文明と共生しながらその歴史を形成したことをよく理解することができる。

この函石浜遺跡の立地する京丹後市箱石の浜辺には、多くのハングル文字を記したペットボトルなどが流れ着いている。海流に乗って、人力によらない自然のなかでも朝鮮半島からここにたどり着くことができるわけで、ヒトが、船を用い、方位を操作しながら、容易にとまではいえないにしても、常時に渡来現象があったことを推察することができるし、この時代からの日本海航路ないし環日本海文化圏の存在を確認することができる。

II. 「東アジア世界」への視野

日本列島の歴史と文化を考える際、列島を含めた東アジア世界全体を視野に入れる考察は、すでに明治の近代史学の出発時点から存在する。というよりも明治の始まりには日本歴史よりも世界(この場合はむしろ欧米地域だが)、日本近代化が欧米をモデルにした以上当然ではあるが、たとえば「万国史」の類は翻訳も含めて多く執筆・刊行されている。その分析に及ぶ準備はないが、とにかく「外国」を視野に入れて日本を考えるという視角は、その限界はともかくとして、早くからあったといつてよからう。

いきなり津田左右吉(1873-1961)をここにあげるのは乱暴のそしりを免れないだろうが、氏の著作は多くがアジア、中国・東洋に関わったものである。学士院会員の登録は「東洋哲学」だったそうだが(坂本太郎「津田博士の人と学問」、『津田左右吉全集』1巻月報・1963による)、ただその論述にはアジア世界のなかで日本歴史・文化の形成を考えようとする姿勢は濃くはない。

氏は最晩年のことではあるが「アジアは一つではない」を著わし(『心』8-1・1955。のち『津田左右吉全集28』岩波書店・1966)。「東洋」は「日本とシナ及びインド」として、それらは風土・人種・言語を異にし、生活様式・家族制度・社会組織・政治形態、また生活感情・生活意欲・生活態度、さらに事物の考え方、道徳観・人生観・世界観など、「同じところは殆ど無い」とまで言っている。日本列島での歴史形成における東アジア世界の連環・関係は、否定されているにむしろ近い。

日本歴史学のうえで東アジア世界を、世界を構成する単位の一つとして分析し、その業績が後に受け継がれたのは、多くの人が述べるように西嶋定生と石母田正であろう。

この点については早く井上光貞『わたくしの古代史学』(文藝春秋社・1982。のち『井上光貞著作集11』<岩波書店・1986>)で「東アジアと古代日本という命題」「のおこりは1962年の石母田・西嶋氏」の論文だと指摘された。また田中史生『越境の古代史』(筑摩書房・2009。のち角川文庫・2017)に、この点に関する要を得た論述もある。

今その詳細に触れる余裕はないが、西嶋定生「六一八世紀の東アジア」（『岩波講座日本歴史2』岩波書店・1962。のち解体・再編などを経て『日本歴史の国際環境』東京大学出版会・1985）がまずその先鞭をつけた。中国を軸とする冊封体制さくほうたいせいや、漢字文化などの共通する要素の存在をもって、東アジア世界の存在が説かれた。倭・日本の歴史形成もこの東アジア世界のなかのものとして位置付けられるわけで、とりわけこの冊封体制概念は古代日本史の見方を大きく変えることになった。茫漠と考えられてきたたとえば邪馬台国「女王」の卑弥呼は、魏王による冊封によってはじめて「親魏倭王」たり得たわけで、東アジア世界抜きにその存在を論じることはできないことになる。日本古代史研究に、まさに新しい地平をもたらしたのである。

ほぼ同じ時期、石母田正「日本古代における国際意識について—古代貴族の場合—」（『思想』454号・1962。のち『石母田正著作集4』岩波書店・1989）・「天皇と『諸蕃』—大宝令制定の意義に関して—」（『法学史林』60-3・4号1963。のち同書）が著わされる。論題からも察せられるように倭・日本の歴史が、国際的契機を必須のものとして展開されることを強調する。田中がいうように「古代列島社会において、国際政治と国際関係とが互いに分かちがたく結びついている構造」（田中前掲書）を指摘するわけで、その観点から社会構造にも分析の手を及ぼす。いわゆる「首長制論」で、これ以上立ち入れないがともかくこれ以後、一種の“流行”の気配をもともないながら、古代日本の歴史・文化の展開は国際的関係を基軸にして論じられることになった。しかし前述したように、西嶋・石母田の議論にも、伝来・流入のルートについての観点はほとんど含まれておらず、なお課題の残る現状にあるといえよう。

この直後くらいに朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の金錫亨キムソクヒョン「三韓三国の日本列島内分国について」（『歴史科学』1963・1号<韓文>。のち詳細化して『初期朝日関係研究』社会科学院出版社・1966<韓文>。邦訳『古代朝日関係史—大和政権と任那—』勁草書房・1969）が発表されている。内容に触れる必要はないだろうが、『日本書紀』に見える朝鮮三国は実は日本国内における「朝鮮移住民」の「小国」だとした。古代日本史に則していえば、倭国は「朝鮮移住民」によって全面的に形成されたというものであった。日本学界での評価は著しく低いし、論証には多くの無理があるが、日本歴史の国際的環境、とりわけ古代日本と朝鮮半島の関係を考える際に、大きな示唆と影響をあたえるものであったことは疑えない。

むしろ現在では東アジアという視界を越えて、ユーラシア世界にまでウイングを広げるのが古代史研究の基本姿勢になっているが、なお北アジアや南アジア・南洋などには関説されることは少ない。日本列島の歴史・文化の形成における国際的環境の研究はまだ残された課題も多いが、ともかくも「東アジア世界」という観点の成立とその認証をここでは確認しておきたい。

Ⅲ. 渡来のルート

ただこれらの分析には、時空を越えた「関係」は指摘されるが、その影響の根本ともいべき影響のルート、渡来人・渡来文化に関してはその渡来の具体的な道筋ということになるのか、それについては自明のこととされ、ほとんど触れられるところがない。

なぜそれが問題にされなければならないのかというと、起点と終点との間の関係が指摘され、したがって影響を及ぼしたことが分かっても、そのルートの線上の地域で、史料は失われてしまっ

ていてもかならず文化・文明の“影響”を刻んでいるはずだからである。点としてでなく、線として、さらには面としての文化・文明の展開を考えねばならないのだといってよいだろう。史料の数は少ないがそのルートについて考えてみたい。

右に述べた貨泉がそうだが、その日本海岸からの出土は、日本海航路とまでいえるかはともかく、渡来のその道筋があったことをよく物語る。後世のことだが、高句麗は初回の使節が日本海横断ルートで、「風浪に辛苦みて、迷いて浦津を失」ったとはいうものの「越」の「岸」にたどり着いたし（『日本書紀』欽明天皇31年4月甲申条）、高句麗の後継国の渤海国使節も同様で、そのほとんどが日本海横断ルートをとって日本国にいたっている（上田雄『渤海使の研究』明石書店・2002参照）。この日本海横断ルートの実際を示す資料は多くはないが、「横断」を疑うことはできない。

たまたま“発見”したのだが、朝鮮半島が日本の植民地化される前ころ、志摩（三重県）の漁民が島根県竹島（韓国名独島）にアワビ漁に出かけたという記載があった（瀬川清子『海女記』三國書房・1942）。志摩の「国崎村」（現三重県鳥羽市）での聞き書きで、総勢50人で「一杯のトッペ」（「トッペ」は本来は「ボラ楯網漁の網船」で、「海の博物館」（三重県鳥羽市）展示のそれは、長さ11尺8寸、幅2尺4寸3分である。また『三重県水産図説』（1883完成）には「網船ト称ス」として「方言トッペイ」をあげ、「惣長式丈五尺、巾四尺七尺」とある。これらの点については皇學館大学櫻井治男教授・鳥羽市立海の博物館平賀大蔵館長の教示および資料提供を得た。）に「女（女子）こが二十人、男が三人」乗り込んで「志摩の国崎から朝鮮まで行った」とのこと。途中「出雲の境」（境港）に寄り、ついで「隠岐の島から朝鮮の竹島と云ふ離れ島」へ渡ろうとしたものの風に妨げられていったん隠岐へ引き返した。今日がいいとの神託を得てあらためて出発、「（ひと）よさ一日」で「日暮れ」に竹島に着く。繫留に難渋していたところ、「島にゐる朝鮮の人も天草島から来た漁師も」助けてくれたという。そう大きくない、しかも人力操行船でこの島に、日本からも朝鮮半島からも航行していたのである。時代は大きく異なるとはいえ、渡来という事象を考える時に参考になるだろう。

なおちなみに、瀬川聞き取りに見えるものも含めて「日本人や志摩の人が竹島と呼んでいた島は、竹島違いの鬱陵島であった」とする見解もある（福田清一『志摩と朝鮮を小舟で往復した志摩の海女』2006・私家版。本書閲覧については三重大学山田雄司教授の助力を得た）。今も鬱陵島のすぐ東2キロほどに「竹島」があるが（『韓国道路地図』漢文・英文版2009・中央地図文化社）、「竹島問題」に立ち入る準備はなく、どちらの「竹島」であるにせよ、ここでは日本海を横断して隠岐からそこまで人力走行の漁船で行きついていることを確認するとどめる。

古代における渡来人の、渡来「ルート」をうかがわせる史料は多くはない。その一つだが、『日本書紀』崇神天皇2年是歳条がある（読みは基本的に日本古典文学大系『日本書紀』上・下＜岩波書店・1967,65＞による）。

崇神天皇の時代、「額ぬかに角つのお有つひたる人」が「一つの船このくにに乗りて、越国けひのうらの筍飯浦とまに泊」った。そこで角の有る人の寄港地だということでそこを「角鹿」と名付けたという。敦賀（福井県敦賀市。古代にはr音とn音は容易に交替する）のことで、典型的な地名起源伝承である。つまり先にツヌガという地名があって、この「ツヌ」を角として語ったものである。

この人物は「意富加羅国の王の子」で、名を「都怒我阿羅斯等」といい、海を渡って渡来してきたということになる。「意富加羅」はおそらく「大加羅」と称された金官加羅国で、現在の

金海地域（慶尚南道金海市・プサン広域市）にあたるだろう。したがってその渡来コースの設定は対馬海峡経由で、日本海横断を想定したものではないとも思われるが、まず「穴門」にいたった。「穴門」は長門（山口県北部）のことで、そこから「出雲国」を経てここに到達する。

問題はその間の行程である。それは「嶋浦に留連ひつつ、北海より廻りて」のものだったという。「北海」は日本海の古代呼称で、つまりは「北海」こと日本海岸の島や浦をつたわりながらの航行であったことになる。史料表現の「嶋浦」の実態は文字からはつかめないが、日本海岸にはたしかに島も浦も多く存在する。もちろん現在は埋め立てられたり、あるいは自然の土砂堆積などで島や浦は潟湖の体をなさないものが多いので、地図を見るだけでは理解しにくい、古代においては多くの潟湖に恵まれていたのである。気象知識も発達せず、造船技術も未熟であった時代、こうした日本海岸の潟湖は絶好の退避場所になった。それだけが原因ではないだろうが、これらの潟湖を伝わっての日本海航路が存在していたのであって、多くの人や物がこの航路によって移動していたのである。むろん都怒我阿羅斯等渡来は伝承の世界でのことだが、その背景の地理的叙述は史実を反映していて、日本海航路とでもいうべき航路の存在を指摘できる。

IV. 日本海航路上の敦賀

今少し日本海航路のことに触れると、敦賀（福井県敦賀市）の位置が注目される。東日本は、中部山岳地帯と称される山塊が縦断し、日本海側北陸地域と古代首都圏との交通を妨げていたが、そのために都鄙間交通の拠点になったのが敦賀であった。

むろん陸路として近江・越前・加賀・越中・越後・佐渡、それに若狭・能登を通じる支線も含めた北陸道があったが「小路」で（『令義解』厩牧令諸道置駅馬条）、官道としての位置づけは低かった。もっとも、「大路」「中路」「小路」と区分された官道のうち、大路の山陽道、中路の東海道・東山道以外はすべて小路だったから、北陸道のみがとりわけてランクが低かったというわけではないが、ただ北陸道の場合は陸路が使用されることはあまりなかった。

それは北陸道に限ったことではなく、特に「大路」として日本列島で唯一最高の格付けだった山陽道も、中国山地から瀬戸内海に向かって突き出す多くの尾根筋、つまりは峠に陸上交通は妨げられて（卑近なたとえだが山陽新幹線に乗ると多くのトンネルを通過するが、張り出す尾根筋を次々に突っ切ることになるからである）、実際には瀬戸内海の水上交通が用いられることが多かった。大量輸送の可能な水上交通は、海賊・湖賊などの危険はあったものの、近代日本になって鉄道が普及するまでの主要なヒト・モノの移動・輸送手段であった。

敦賀の歴史的な重要性をよく物語るのは、官物である「雑物」の輸送に関するものである。「諸国の雑物を運漕の功賃」の規定が『延喜式』に見えていて（『延喜式』主税寮式上）、北陸道地域は若狭国のみが若狭街道（九里半越え。現国道303号線）で勝野津（滋賀県高島市。以降は琵琶湖水運）に運送されるとあって他と異なるが、他の越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡はいずれも海上をまず敦賀津まで輸送することになっていた。そこからいくつかある越前・近江の国ごかいを越える陸路で琵琶湖北岸に輸送、塩津・海津などの津からは琵琶湖を南下する水運を用いた（木下良「三関跡考定試論」『人文地理学論叢』柳原書店・1971所収、『新修大津市史1』大津市・1978、など参照）。敦賀は北陸方面からの移動・輸送の中継地点であった。

仲哀天皇は敦賀に行幸し、「行宮」を設け、それは「筥飯宮」と称された（『日本書紀』仲哀

天皇元年2月戊子条)。行幸地となったばかりか、短期とはいえそこに滞在を前提とする行宮を設営、そしてその名称までさだめられたということになる。日本海岸のこの地の重要性をよく示している。

そして天皇はここから「南国」を「巡狩」する(同3月丁卯条)。皇后たちを敦賀にとどめたまま「紀伊国」に行ったというから、この「南国」は北海道方面のことで、ここで熊襲がそむいているという情報を得てこれを打倒しようとした。そこで紀伊から「穴門」(長門)、つまり瀬戸内航路を使って九州方面に向かうという設定になっていて、その穴門から敦賀の皇后に穴門に来るようにとの指示を出す。天皇は「豊浦津」(現下関市豊浦町)に滞在し、そこへ皇后が「角鹿」から「淳田門」を経て豊浦津で合流したという(同6月条)。淳田門の位置は不明だが、話の流れからして敦賀から豊浦津まで日本海航路が想定されていることは疑いなく、都怒我阿羅斯等のちょうど逆のコースを行ったことになるだろう。創作の伝承ではあるが、ここでも日本海航路の存在を指摘することができる。

日本海航路の存在に裏付けられた日本海岸の“パワー”は大きかった。

垂仁天皇は「丹波の五の女」を后妃とした(『日本書紀』垂仁天皇15年2月甲子条)。この「丹波」はのち丹後が分離される前の丹波・丹後(京都府中部・北部)全体の地域名称で、これだけではそのうちのどこか不明だが、五人の一人に「竹野媛」が見え、この「竹野」は今もその地名が残る丹後半島のほぼ先端部西側近く、京丹后市丹後町竹野にあたり、京都府下最大級の前方後円墳である神明山古墳、また隣接して式内社竹野神社もある。古代天皇の婚姻はさまざまな原因で成立するが、多くはいわば政略、つまりその女性の属する豪族との提携関係の締結を目指してのものといつてよい。この地域の豪族が大王家によって姻戚関係の締結が求められるほどの勢力であったことを示し、では何ゆえにそれほどの勢力を築けたのかといえば、日本海航路、つまりはその流通・交通の掌握であった。神明山古墳は現在は埋め立て等によって内陸部の丘陵先端上になってはいるが、古墳の築かれた当時は深く浦が入りこんでいて、かつては良港としての機能を持っていたのであり、その眼前に古墳は位置していたのである(魚津知克『海古墳』研究の意義、限界、展望)、『史林』100-1・2017参照)。

いっそう日本海の持つ意味を物語るのは、周知の継体天皇擁立をめぐる様相であろう。詳細に及ぶことはできないが、その擁立基盤はまぎれもなく日本海岸にあった。前段で状況理解の不可能な倭彦王の擁立失敗を述べたあと、近江在住の彦主人王が越前から迎えた振媛との間にもうけた継体が新たに擁立される。この時継体は、父の死後に母が郷里越前の「高向」に帰り、そこで成長したことになる(『日本書紀』継体天皇即位前紀)。この高向はもとの高椋村で、現福井県坂井市丸岡町にあたり、九頭竜川の河口近くである。

そして後年継体を迎えにいった使者が向かったのは、越前「三国」であったという(『古事記』では「近淡海」<近江>から迎えられたとあって異なるが、ここでは論じない)。同じく坂井市三国町にあたるが、北前船の寄港地としてなど、近代にまで港湾機能をもって繁栄した日本海岸の港である。継体はこの周辺、つまり日本海岸を中心的なバックグラウンドとして存在していたわけで、この地域の持つ経済力を基礎とする豪族勢力の巨大さを推測することができる。もちろん実際のその即位については、継体が河内地方現大阪府八尾市あたりの豪族である河内馬飼首荒籠とのネットワークを持っていたこと、つまり瀬戸内海水運での海外との交流・交渉をも情報として入手していたことを見逃すわけにはいかないが(井上満郎『継体天皇と河内馬飼首荒籠』、『京都府埋蔵文化財論集7』京都府埋蔵文化財調査研究センター・2016)、即位のおおもとの基盤はまぎれもなく日本海岸地域にあった。

敦賀の重要性は、他にもそれを示す史料がある。

応神天皇は「越国」に行き、「角鹿」の「筍飯大神」を拝した（『日本書紀』応神天皇即位前紀）。この時に大神と応神はその名を「相易え」、ために大神は「去来紗別神」、応神は「菅田別尊」となったという。古代においては名前はその人の生命力そのものと捉えられたが、天皇という古代日本最高・絶対の存在がその名とするほどに、敦賀の筍飯大神の神格は高かったわけである。

武烈天皇の時代、平群真鳥が国政を専断し、「日本に王」たろうとした（『日本書紀』武烈天皇即位前紀）。この時真鳥の男子の鮪は、武烈が妃としようとした影媛を横取りする。事を知った武烈は「父子の無敬き」とがめ、大臣の伴金村に命じて討伐させた。滅ぼされる際に真鳥は、「広く塩を指して」呪いをかける。その時に「角鹿海」の塩だけ呪いをかけるのを忘れ、ために「角鹿の塩は、天皇の所食とし、余海の塩は天皇の所忌」とした。呪いのかかっている敦賀の塩だけは天皇の食膳に供されたというのであり、他にこの事実は確認できないが、敦賀だけが特別扱いされてしかるべき地であったことが理解できる。

少し後のことになるが、「諸楽（奈良）の左京」住人の檜磐島が大安寺の「商いの錢」三十貫を借りて「越前の都魯鹿津」に出かけた（読みは本郷真紹監修『考証日本霊異記』法蔵館・2018による）。そこで物品を「交易」して利益を得ようとしたのであるが、奈良平城京からかなり遠方の敦賀にまで商品の買い付けに行っているのであり、ここへ来れば多種多様の商品が入手できるということである。そこには北陸一帯の産品とあわせて外国産の物品も集まっていて、単なる中継地点をこえて、流通の拠点でもあったことになる。国内ばかりか東アジア地域との交流・交渉の接点でもあったことは、いうまでもない。

これまた後年のことではあるが、「商人の主領」に設定されている架空の「八郎真人」は、「東は俘囚の地」から「西は貴賀が嶋」までを商圈として商業活動を行っていた（藤原明衡『新猿楽記』。読みは主として日本思想大系『古代政治社会思想』岩波書店・1979による）。彼は「泊浦にて年月を送」っていたが、ここには見えないものの敦賀もまちががなくそうしたうちの一つで、そこに記載された膨大な「唐物」、すなわち輸入品が売り買いされたかと思われる。まさに「古代大陸交渉の要地の一つ」（日本古典文学大系『日本書紀』下巻岩波書店・1967）であった敦賀は、ただに渡来人とその時代に限らず日本列島における「表日本」の根幹の役割を果たしていたのである。

V. 渡来人の渡来

さて具体的な渡来人の渡来について、渡来のルートについては史料的に不明に近いのだが、述べたい。渡来人については上田正昭『帰化人』（中公新書・1965）以来、「帰化」・「渡来」の用語問題をもふくめて多くの人が論じているが、ここでは渡来系氏族の雄族としてしばしば取りあげられる秦氏・漢氏について考えてみる。

秦氏は早く、漢氏との比較においてであるが「殖産的」と称されたように（竹内理三「古代帰化人の問題―漢氏についての覚え書―」『日本歴史』10号・1948、のち『竹内理三著作集4』角川書店・2000）、日本列島の産業開発に大きな貢献をした（井上『秦河勝』＜吉川弘文館・2011＞でそれなりに論述しているので参照されたい）。その渡来については『古事記』『日本書紀』とともに記載がある。

『古事記』では応神天皇時代に記事をかけて「この御世に」（『古事記』 応神天皇段。読みは主として新潮日本古典集成『古事記』 <新潮社・1979>による）、①海部・山部などを定めた、②「劔の池」を造った、③「参渡」ってきた新羅人を建内宿禰に引率させて「百濟の池」を造った、④「阿知吉師」（『日本書紀』では「阿直伎」）・「和邇吉師」（同「王仁」）が渡来した、⑤「手人韓鍛」「呉服」など技術者が渡来した、に続けて「秦の造が祖、漢の直が祖」が「参渡り来ぬ」と記している。異なった時点の異なった出来事をここにまとめて記載していることが知られるが、ことの詳細な分析は避けるが、①秦氏・漢氏の「祖」=祖先が、②応神天皇時代に渡来してきた、と漠然と記すのみである。どこからとも、どれだけの人数とも、先祖が誰とも、いっさい記録していない。これが渡来人についてのもの「記憶」で、渡来の実態を“想像”すれば理解できるが、渡来という現象はあくまで民衆レベル・生活レベルでなされた移動・移住で、本来的に記録されるようなものではなかった。

むろん一言で「民衆レベル」といえない7世紀後半の百濟国滅亡にともなう官僚の集団「亡命」・集団「招聘」のような、そうでない要素を含むものもあるが、それでも661年の「近江国の藝田」に配された「唐の俘 一百六口」（『日本書紀』 齐明天皇7年11月戊戌条）、665年の「近江国の神前郡」に配された「百濟の男女四百余人」（同天智天皇4年2月是月条）、同年の「近江国の蒲生郡」に配された「佐平余自信・佐平鬼室集斯等、男女七百余」（「佐平」は百濟国の官位。同天智天皇8年是歳条）など、また記録に残らなかったものも含めて7世紀後半における渡来も、多くが一般民衆であったことは確実である。

この『古事記』の秦氏渡来についての伝承は、『日本書紀』に対応する記載がある。「弓月君、百濟より来帰り。」とし（『日本書紀』 応神天皇14年是歳条）、彼が「己が国の人夫百二十県を領いて帰化」したものの、これが「新羅人」によって妨げられ、「加羅国」に抑留された。そこで葛城襲津彦を派遣、加羅から召還しようとするが襲津彦は「三年経る」まで帰国しなかった。そこでこれは新羅の妨害によるものとして精兵を派遣、ついに彼らは渡来するにいたることになる（同応神天皇16年8月条）。

秦氏は新羅系の渡来氏族であり、そのハダ（ハタと清音で読まれることが多いが、正しくはハダの濁音）の名乗りは現在の韓国東岸、慶尚北道蔚珍郡の「波旦」によるとしていいと思っているが（拙著『秦河勝』）、ところが『日本書紀』には「百濟より」と明記される。これをもって秦氏は百濟出身とする説も唱えられるが、「より」とあるのは「經由した」ということと私は解釈している。『日本書紀』にはここがまさにそうなのだが、渡来が新羅によって妨害されたと創作するように、しばしば新羅との敵対関係を反映する記事がある。これは『日本書紀』成立時の認識に、史実として新羅国と敵対関係にあったことの記憶を反映するものに過ぎず、秦氏渡来での新羅国の妨害をそのままに史実と見做すわけにはいかないし、あわせて百濟の「出身」だという説に加担することもできない。比較的国際関係の良好だった百濟国を經由したのだと創作したと考えるのが適切だろう。

要するに『日本書紀』でも秦氏の系譜や、具体的な渡来のさまは記録されていないわけで、『古事記』と比べて祖先は「弓月君」、規模は「百二十県」、「百濟より」渡来、新羅に妨害されて途中の「加羅」で停滞、襲津彦がそれを召還、とかなり詳細の度を加えているが、それでも先祖が中国王朝、まして秦の始皇帝とはどこにも記していない。一族の系譜については、はるかにさかのぼる5世紀、あの稲荷山古墳（埼玉県行田市）の鉄剣に当事者の「乎獲居臣」の「上祖意富比坼」から「其の兒多加利足尼・其の兒名は巳加利獲居・其の兒名は多加披次獲居」と代々の

乎獲居臣にいたるまでの系譜が記載されており（読みは岸俊男・田中稔・狩野久『稲荷山古墳出土鉄剣金象嵌銘概報』埼玉県情報資料室・1979による）、また当然『日本書紀』にも多くの祖先系譜が記載されている。したがってもし弓月君の祖先系譜が存在しておれば、ここまで詳細に渡来の様相が記されているのに、ここに秦氏の系譜が記載されないはずはない。それが無いということは、祖先系譜が確立していなかったからだというほかない。

つまり秦氏はその系譜について当初は記憶も記録もなかったのだが、弘仁5年（814）に完成した『新撰姓氏録』段階になると事態は一変する。これは各氏族に保持されていた本系帳を元として編さんされたのでこれ以前の史料要素をも含むが、ともかくその秦氏に関する記載はいきよに詳細化する。この書物の何ヶ所かにその記載は見えていて、秦氏について「秦の始皇帝の後なり」とはっきりと中国秦王朝の皇帝に結びつけている（『新撰姓氏録』山城国諸蕃。読みは主として佐伯有清『新撰姓氏録の研究考証編5』＜吉川弘文館・1983＞による）。そしてそこから「功智王」「弓月王」、この弓月王が応神天皇時代に「百廿七県の伯姓を率て帰化」し、さら「真徳王」「普洞王」「雲師王」「武良王」と続ける。まさに系譜が成立しているのであって、『新撰姓氏録』ないし本系帳段階で秦氏が秦の始皇帝の子孫として明確に位置付けられたことが推測できるだろう。要するに祖先系譜は現実・史実の渡来とは異なる“あとづけ”なのであり、この系譜をもってこの氏族が秦の皇帝の子孫といえないことはむろん、中国からの渡来であるということもいえない。この秦氏と「同祖」ではあるが別の一族として立てられた「太秦公」氏は「秦始皇帝の三世孫」の「孝武王」が始祖で（同書左京諸蕃上）、そこから「功満王」「融通王」と続けていて、同じ始皇帝を先祖とするものの、系譜は異なって創作しているのであり、ここでも“あとづけ”であることを知ることができる。

いっぽうの「頭腦的」氏族（前掲竹内論文）と称された、漢氏はどうか。『古事記』での渡来伝承は、右に触れたように秦氏とともにただ応神天皇時代に渡来があったというのみで、どこからとも、どれだけの規模かとも、先祖が誰とも、具体的な記載をこの氏族もいっさい持たない。

『日本書紀』では、同じ応神天皇時代のこととして、「倭漢直の祖阿知使主、其の子都加使主」が、「己が党類十七県」を率いて「来帰」りとする（『日本書紀』応神天皇20年9月条）。倭漢氏は一般に漢氏と称する氏族集団の中軸をなす一族で、飛鳥（奈良県高市郡明日香村）を中心に、全国に広がって居住した。のちむろん中国王朝漢の皇帝子孫を主張するのだが、祖先人名が特定され、規模も特定されているが、ここでもやはり先祖の名を記すのみで、その系譜は記されない。『日本書紀』時代は系譜、つまり門地が重要視された時代であるにもかかわらずここに系譜が出ないということは、やはり秦氏のケースと同じようにその系譜が成立していなかったことを物語るものと思われる。

漢氏の祖として『日本書紀』に登場する阿知使主は、のち子の都加使主とともに「縫工女」を求めて「呉」に派遣され（『日本書紀』応神天皇37年2月戊午条）、呉王から与えられた「兄媛・弟媛、呉織、穴織」を伴って帰還している。技術者を連れ帰るという重要な役割を果たしているのだが、やはり祖先系譜は記されていない。

のちこの一族の最大勢力となる坂上氏の系譜に、その詳細が見えている。

よく知られた征夷大將軍坂上田村麻呂の父である菟田麻呂が、延暦4年（785）に上表し、忌寸から宿禰への改姓を申請した（『続日本紀』延暦4年6月己酉条）。そこで菟田麻呂は「臣らは、もと是れ後漢靈帝の曾孫阿智王の後」であって、漢が滅亡したときに中国を出て「帯方」に行き、そこからさらに日本に渡ったという（読みは主として新日本古典文学大系『続日本紀5』＜岩波書店・1998＞による）。「帯方」は帯方郡で、現在の韓国京畿道から北朝鮮黄海道あたりにあった後漢にはじまる植民支配地である。

のちこの阿智王が「東国に聖主あり」と聞いて、「母弟^{ていこうとく}廷興徳と七姓の民」を率いて「帰化来朝」し、それは「^{ほむたのすめらみこと}誉田天皇」すなわち応神天皇の「御世」だったという。

このことは同じ坂上荊田麻呂が宝亀3年(772)に大和国高^{たけち(たかいち)}市郡の郡司任命を申請した折にも述べており(『続日本紀』宝亀3年4月庚午条)、「先祖^{あちのおみ}阿智使主」が応神天皇時代に「十七^{たみ}嵜の人夫を率いて帰化」してきたとある。この二つの史料はともに『古事記』『日本書紀』をベースにしたもので、それに漢氏固有の伝承を付加して、つまりは詳細の度を加えて創作したものであることは明らかであろう。

つまり漢氏は①中国皇帝の子孫であり、②朝鮮半島を経由して渡来した、ということになるのだが、この②については秦氏のほうはその要素を史料の上で持たない。秦の始皇帝との系譜関係を主張するのみで、朝鮮半島からの渡来ないしそのルートの伝承は記されていない。

VI. 渡来の時代

渡来人たちが渡来した時代はいつか。これについても早く上田『帰化人』(前掲)が(1)紀元前200年頃、(2)「応神・仁徳朝を中心とする」5世紀前後、(3)「雄略朝から欽明朝」の5世紀後半～6世紀はじめ、(4)7世紀後半「とくに天智朝の前後」、を指摘されて以後多くの考察があるが、諸学説の検討はさけて私の重要とする画期について、京都盆地(京都府京都市)を舞台として述べる。

京都の渡来人といえば秦氏で、その居住は、大和高市郡の漢氏以外の氏族が「十にして一二なり。」(『続日本紀』宝亀3年4月庚午条)といわれるのに対比できるほどその比率は高かった。

秦氏に關説した著書は多いが、加藤謙吉『秦氏とその民』(白水社・1998)・水谷千秋『謎の渡来人 秦氏』(文春新書・2009)が包括的にこの氏族を論じている。

秦氏と京都とのかかわりは、『政事要略』巻54「交替雑事」に引用された「秦氏本系帳」にその内容を見ることができる。すなわち、

秦氏本系帳にいわく、^{かどのおおい}葛野大堰を造ること、天下に誰か比検すあらんや。是れ秦氏の種類を率い催して造り構うところなり。昔、秦の昭王、洪河を塞堰して溝澮し、田を開くこと万頃にして、秦の富数倍す。謂うところ鄭伯の衣食を沃すの源なり。今の^{うらお}大井堰の様、則ち^{おおいのせき}彼に習いて造るところなり。

とするもので、彼らが祖とする秦王朝の昭王(在位紀元前307-251。始皇帝^{せい}政の曾祖父)の事績や故事を引き、秦氏が「種類」(一族)を動員して「葛野大堰」を建設したという。「葛野」川は現在の桂川^{かつらがわ}のことで、古代にはこう呼ばれた。そこに「大堰」を造ったといい、それは「今の^{せい}大井堰」で、自分たちの祖先の偉業にならっての建設というのである。

「葛野大堰」であるここに述べられた「今の^{せい}大井堰」の正確な位置は不明だが、少なくとも平安時代には「大堰」は現在しており、しばしば貴紳の遊覧に用いられた。現在も桂川^{とげつ}の渡月橋^{ききょう}あたりは、私のように京都出身者は大井(堰)川と呼んでいて、橋の北、少し上流部に、平安時代の秦氏出身の^{どうしやう}道昌による修復を記念する近代の碑石がある。

この記載は本系帳という自族を顕彰するための史料記載だから、そのままには信頼できない。別の史料・資料に基づいて検討しなければならないし、秦氏渡来の時期についても明示はない。

そこで参照されるべきは、古墳築造に関する考古学の調査・研究成果である。

古墳発生地とおぼしき奈良盆地に隣接するので、京都盆地にも早くから古墳は営まれた。すでに開発などによって消滅してしまったものも多いので分析はそう簡単ではないが、京都盆地にも4世紀初頭から古墳の築造は認められる。ただその地域展開には大きな特徴があって、岩倉・八坂・深草・桃山・山科・低地・嵯峨野・宇治・長岡・向日・檜原山田とグルーピングされたなかで、「嵯峨野グループ」には5世紀末ころまで古墳が出現していない（丸川義広「京都盆地における古墳群の動向」、『田辺昭三先生古稀記念論文集』真陽社・2002所収）。おおまかにいえば古墳は豪族の墓所であり、古墳がないということはそこには豪族がいなかったということになる。では5世紀末にどうして古墳が成立するのか。つまりは豪族が成立することができたのか。

そこで参照するべきが『政事要略』の記載であり、「葛野大堰」の建設である。古代にあっては飲用水は基本的に井戸・泉から採取するので、「堰」はむろん水田農業の用水確保のためであり、しかもそれは規模の大きな「大堰」とされている。他の個所では「用水の家」、つまりそこから直接の取水を受ける家だけでは「修理に堪えざる」ほどの規模の例として「葛野川堰」があげられていて（『りょうのしゅうげ 雑令ぞうりょう 逸文>取水溉田条「古記」）、灌漑の範囲がきわめて広がったことが推察できる。つまりは大量の田地を灌漑したわけで、その対象に嵯峨野も入っていたことは容易に想定できよう。この秦氏が主導した事業によって、従来は水田農業の不可能だった高燥な「野」の嵯峨野が、稲作可能な地域環境に変じたのである。

そのように考えることができるのであれば、「嵯峨野グループ」の古墳は多くが秦氏一族の墓所ということになり、古墳が5世紀末だとするとその豪族の生きた時代は5世紀後半ということになる。このころに秦氏は京都盆地に渡来・定住したのであり、「渡来」と京都「定住」の時期が一致するかどうかなど検討課題は多いが、5世紀後半、このころに秦氏の渡来時期を求めることはおおむね誤っていないのではないか。

この5世紀、とりわけその後半は、朝鮮半島は政治的にきわめて流動した状況にあった。早くこの時代について「五世紀は移住民の世紀」と言ったのは山尾幸久『古代の日朝関係』（塙書房・1989）だが（のち「五世紀の第2四半期から末にかけて」とされている<同氏『古代の近江』サンライズ出版・2016>）、まことにそのとおりで、朝鮮半島から多くの人々が日本列島に移住してきた。また朝鮮半島側からの渡倭（韓国では「渡倭人」の語が使用されることもある）をうながす誘因、つまり「移住民の必然性」として「朝鮮半島において、彼らの安定した暮しを成り立たなくさせるような、政治的・軍事的な状況」と、他方で「日本列島の側に彼らを必要とする社会的・経済的な事情」があったことが（山尾前掲『古代の日朝関係』）、見逃されてはなるまい。

本稿で分析はできないが、朝鮮半島側の、渡来人をいわば“押し出す力”、「状況」は主に戦乱である。5世紀のはじめ、高句麗が強大化し、こうかいどおう 広開土王の時代を経て426年、南進して丸都城（現中華人民共和国吉林省集安）から平壤城（現朝鮮民主主義人民共和国平壤）に遷都した。475年にはこの高句麗の百濟攻撃によって蓋鹵王は戦死、国家としての百濟国はいったん滅亡に追い込まれる。一般国民がこれらの戦乱をさけて移動を余儀なくされることは当然で、百濟については高句麗の攻勢は北から及んだから、人々は南にそれをさけて移動することとなった。「国境」のなかった時代、それらの人々は対馬海峡・日本海を越えて日本列島に移住したのである。

VII. 渡来人の歴史的意味

秦氏など渡来人の渡来は、5世紀に大きなピークを持つことが以上で理解できるが、だとして彼らは日本の歴史・文化にいかなる“力”として働いたのか。

その“発見”は大きな話題となったが1978年9月、埼玉県行田市稲荷山古墳出土の鉄剣の金象嵌の銘文が解読された（前掲『稲荷山古墳出土金象嵌銘概報』）。さまざまな議論が行なわれ、またなお確定されていない要素もあるが、おおむね理解が共有されているのは、この古墳に埋葬された地元豪族の「乎獲居臣」が、ヤマトの「獲加多支鹵大王」こと雄略天皇の「斯鬼宮」に、「杖刀人首」として出仕していた、ということである。つまり雄略天皇の時代には、ヤマト王権は関東までを領土・領域として支配下に組み入れていたことが確認されたわけで、国家がこの時代に成立し、それと合わせて大王権力がその同一家系世襲慣例も含めて形成されたことが理解できる。

ここに見える「獲加多支鹵大王」は、熊本県玉名郡和水町の江田船山古墳出土の銀象嵌銘大刀にも「台天下獲□□□鹵大王」と見え（東野治之積読。東京国立博物館『江田船山古墳出土国宝銀象嵌銘大刀』吉川弘文館・1993）、この「獲□□□鹵大王」の銀象嵌の剥がれた「□□□」部分は、稲荷山鉄剣銘から判断して「加多支」と思われ、すなわち熊本県の地元豪族も、このケースでは「典曹人」として雄略天皇の宮に奉仕していたことになる。

この二つの史料の語るものは大きい。つまり関東から九州にかけてを覆う支配権を維持した王権が、この時代には成立していたということになるのであり、『日本書紀』『古事記』が無機的に物語る初代神武天皇以来のヤマト王権とその国家の歴史は、実際には稲荷山鉄剣銘に見える「辛亥年」、すなわち西暦475年のこの世紀から始まることが推定できることになる。「画期としての雄略朝」（岸俊男「画期としての雄略朝—稲荷山鉄剣銘付考—」＜『日本政治社会史研究上』塙書房・1983所収＞、のち『日本古代文物の研究』塙書房・1988）といわれるのはまさにこの史実をもととするし、従来は誇張表現であって史的信頼をおけないとされてきた倭王「武」の「みずから甲冑をつらぬきて山川を跋涉し、寧処に違あらず。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平ぐること九十五国」（『宋書』夷蛮伝東夷条倭国）という上表文も、あながち史実を大きくは外れていないのではないかと推測される。

「国家」の成立については煩雑な議論がある。ここではその議論は回避するが、都出比呂志『古代国家はいつ成立したか』（岩波新書・2011）などで「初期国家」が指摘され、世界史的な観点での検討が進められている。

5世紀は、日本の歴史・文化が力学的発展をとげた時代だと思う。そしてそれを実現させた最大の要素が、渡来人と渡来文化であった。述べたようにすでに紀元前後ころから日本列島は東アジア世界との交わりを持ち、人と文化が渡来してはいたが、まさに力学的にその波がこの世紀に質的にも量的にも大量に渡来・流入し、日本の歴史・文化を前に押しすすめた。

古代日本には多くの渡来人が渡来した。秦氏・漢氏もそうだが、これら渡来系氏族が、在来の日本人と対立・抗争を引き起こしたという事実はまったくない。なるほど中納言の和家麻呂はその「諸蕃」の出自ゆえに薨じたときに、「人となり木訥にして才学なし。帝の外戚を以って特に擢進せらる。蕃人の相府に入るは此れより始る。」とその出世になかば非難の言葉を浴びせられている（『日本後紀』延暦23年4月辛未条）。しかしこうした非難というか対立は政治の世界にとどまり、庶民世界にまで及んだふしはない。渡来人は渡来人の「個性」をその後たも

ち続けるが、“在来”人とともに日本列島の社会を構成したことが見逃されてはならないと思う。

世界には民族の移動にともない激しい対立・抗争が起こり、内乱・戦争にまで及んだ例は枚挙にいとまない。しかし日本にはそうした紛争は皆無なのであって、具体例をあげることは控えざるを得ないが、それは“重層性”にあると考えられる。世界の多くの例のように、移動した先に自分たちの民族性を持ち込み、そこにある在来を否定・排除し、コロニーを築くことは渡来人はなかった。かえって渡来人のもたらした文化・文明との融合によって日本のそれは進展し、高められたのであった。卑俗な表現だがソフトランディングに成功したのであって、渡来・在来の双方の軟らかなお互いへの眼差しが、新しい古代日本を築く原動力となったといっていよう。

付記 本稿は、2018年1月27日の成蹊大学アジア太平洋研究センター主催公開シンポジウム「日本の中の朝鮮文化、再発見」での口頭発表「古代史のなかの朝鮮文化」の内容を元とし、かなりの加筆と補正を行なったものである。ご教示をいただいたアジア太平洋研究センター中江桂子所長（当時）・有富純也文学部准教授、また金沢大学宋安鐘教授ソンアンジョンほかフロアの方々に感謝する。一般市民をも対象とするシンポジウムであり、内容に余論・余談や蛇足の含まれることを諒とされたい。